

の本に書かれていた次のような説明文が、妹の性格にぴったりだと思ってニーチェが付けた、という。「ラマは奇妙な動物である。どんな重い荷物でもすすんで担おうとする。しかし、強制したり扱い方が悪いと、餌を食べるのを拒み、塵埃のなかに横たわって死のうとする。」（注17の前掲書，S.44による）

- 23) 1) の前掲書，S.29
- 24) 1) の前掲書，S.37
- 25) Peters, Heinz Frederick: *Lou — Das Leben der Lou Andreas-Salomé*, München (Kindler) 1964, S.120
- 26) Wollkopf, Roswitha : Elisabeth Nietzsche — Nora wider Willen? Ein bisher unentdecktes Manuskript. In : Gerlach, Hans-Martin/Eichberg, Ralf/Schmidt, Hermann Josef (Hrsg.) : *Nietzscheforschung — Eine Jahresschrift*, Bd.1, Berlin (Akademische Verlag) 1994, S.261 ff.
- 27) Colli, Giorgio/Montinari, Mazzino (Hrsg.) : *Nietzsche Werke-Kritische Gesamtausgabe*, Bd. VI3, Berlin/New York (de Gruyter) 1969, S.322f.
- 28) 27) の前掲書，Bd.VII1, S.113
- 29) 1) の前掲書，S.110
- 30) Colli, Giorgio/Montinari, Mazzino (Hrsg.) : *Nietzsche Briefwechsel-Kritische Gesamtausgabe*, Bd. III1, Berlin/New York (de Gruyter) 1981, S.493
- 31) 30) の前掲書，Bd. III3, S.54
- 32) 1) の前掲書，S.132f.
- 33) 30) の前掲書，S.277
- 34) 15) の前掲書，S.166
- 35) 15) の前掲書，S.169
- 36) 15) の前掲書，S.198
- 37) 30) の前掲書，Bd. III5, S.218f.
- 38) 拙論「ニーチェにおけるユダヤの問題」(『文芸と思想』第60号,1996) 参照
- 39) エリーザベト・ニーチェ (浅井真男訳) 『ニーチェの生涯 (上) — 若きニーチェ』, 河出書房新社1983, 368ページ
- 40) Hoffmann, David Marc : *Zur Geschichte des Nietzsche-Archivs — Chronik, Studien und Dokumente*, Berlin/New York (de Gruyter) 1991, S.12
- 41) 14) の前掲書，S.8
- 42) 10) の前掲書，S.13
- 43) 10) の前掲書，S.14f.
- 44) ペーターズは、その間の事情について次のように記述している。「母親フランツィスカが著作権譲渡の書類に署名するのを拒むうちに、とうとうエリーザベトは自暴自棄になって母親に向かって、あなたは息子の後見人になる資格などないと言い、裁判所に訴えるつもりだと脅迫した。娘のつく悪態と息子の介護に疲労困憊したフランツィスカは、病床に伏した。そして1895年12月18日、重い気持ちで弁護士作成の書類に署名をして、息子の全著作権を娘に譲渡した。」（注1の前掲書，S.208f.による）
- 45) Janz, Curt Paul : *Friedrich Nietzsche — Biographie*, Dritter Band, München /Wien (Hanser) 1979, S.165f.
- 46) 8) の前掲書，S.400

- 5) Montinari,azzino: *Friedrich Nietzsche — Eine Einführung*, Berlin/New York (de Gruyter) 1991, S.IX
- 6) Riedel, Manfred: *Nietzsche in Weimar — ein deutsches Drama*, Leipzig (Reclam) 1997, S.20
- 7) Golz, Jochen (Hrsg.): *Das Goethe-und Schiller-Archiv 1896—1996 — Beiträge aus dem ältesten deutschen Literaturarchiv*, Weimar/Köln/Wien (Böhlau) 1996, S.69
- 8) Gerlach, Hans-Martin: Worte am Grab eines Philosophen. In: Gerlach, Hans-Martin/Reschke, Renate (Hrsg.): *Nietzscheforschung — Eine Jahresschrift*, Bd.2, Berlin (Akademische Verlag) 1995, S.14f.
- 9) このニーチェ論争については、拙論「Nietzsche-Legendeの後退 — 最近のニーチェ論争から —」(『文芸と思想』第31号, 1968) 参照
- 10) Hoffmann, David Marc (Hrsg.): *Rudolf Steiner und das Nietzsche-Archiv — Briefe und Dokumente 1894—1900*, Dornach (Rudolf Steiner Verlag) 1993, S.7
- 11) 8) の前掲書, S.399
- 12) 1) の前掲書, S.13
- 13) Förster-Nietzsche, Elisabeth: *Der einsame Nietzsche*, Leipzig (Kröner Verlag) 1922, S.334
- 14) Hahn, Karl-Heinz: Das Nietzsche-Archiv. In : Behler, Ernst/Montinari,azzino/Müller-Lauter, Wolfgang/Wenzel, Heinz (Hrsg.): *Nietzsche-Studien — Internationales Jahrbuch für die Nietzsche-Forschung*, Bd.18, Berlin/New York (de Gruyter) 1989, S.6
- 15) Macintyre, Ben: *Vergessenes Vaterland — Die Spuren der Elisabeth Nietzsche*, Leipzig (Reclam) 1994, S.196には、次のように書かれている。「ニーチェは膨大な量の未発表原稿を残していた。何箱ものぎっしり詰まった未定稿や走り書き、アフォリズム、他の本からせっせと書き写した引用文などである。ニーチェは、それが自分の書き方であったのだが、自分の考えが具体化するや、精神の治癒のためにそれをそのままばらばらの紙になぐり書きした。ニーチェの未発表の文学遺産であるそれらの遺稿は、深遠と凡庸、貴重なものと内容のないものとがないまぜになっている。」
- 16) 14) の前掲書, S.3 ff.
- 17) Förster-Nietzsche, Elisabeth: *Der junge Nietzsche*, Leipzig (Kröner Verlag) 1912, S.45
- 18) 14) の前掲書, S.6
- 19) 1) の前掲書, S.35
- 20) 17) の前掲書, S.242
- 21) 2) の前掲書, S.373および S.405の注60
- 22) エリーザベトが頑迷な、忍耐強い、激しい気性の持主であったので、兄フリードリヒはいつの頃からか妹に、らくだの一種の動物名である「ラマ」という綽名を献上して、この愛称を生涯にわたって使っている。多少おどけたこの呼称の由来は、ある博物学

チェ資料館が、決して学問的関心に対して広く応じる「開かれた」資料館でなかったことが、結果的に、ニーチェ原典資料の私物化とニーチェ思想の悪用を招くことに通じた、と言うのである。⁴⁵⁾ 同様の指摘は Federico Garrantana の言葉にも認められる。「ニーチェが1889年1月初めトリノで精神錯乱に陥ったあとすぐに、P. ガストとF. オーヴァーベックが組織化された体制を確立することに失敗したのは、明らかに惜しまれる逸機であった。かりにそうになっていたならば、ニーチェの遺稿は直ちに学問的な保護のもとに収納されていたはずである。」⁴⁶⁾

確かに、「女王のごとく」エリーザベトが君臨するニーチェ資料館は、ニーチェの全体像を客観的に発信する公的な組織の態をなしていなかった。それに加えてまた、ニーチェの思想を多面的に究明するためのニーチェ機関誌（たとえば、ワグナー芸術を探るための公的なワグナー機関誌『パイロイト通信』のような）も存在しなかったことが、その後の局面に多大の禍根を残すことになったと言えるであろう。

さて、エリーザベトが運営するニーチェ資料館をめぐるのは、さまざまな人物が交錯しており、それらの人物（F. ケーゲル、R. シュタイナー、C. G. ナウマン、G. ナウマン、ホルネッファー兄弟、P. ガスト、F. オーヴァーベック、E. ローデ、C. A. ベルヌーリをはじめ、M. v. ザーリス、ケスラー伯など）との係わり合いにおけるエリーザベトの対応を検証することにより、ニーチェ資料館の運営の歴史とエリーザベトの人物像、そしてニーチェ歪曲の背景などについて、以下にその問題点の論述を進めたいと思う。

3 ニーチェ資料館運営の暗部

(以下次号)

注

- 1) Peters, Heinz Frederick: *Zarathustras Schwester. Fritz und Lieschen Nietzsche — ein deutsches Trauerspiel*, München (Kindler) 1983, S.12
- 2) Goch, Klaus: *Elisabeth Förster-Nietzsche 1846—1935 — Ein biographisches Portrait*. In: Pusch, Luise F. (Hrsg.): *Schwestern berühmter Männer*, Frankfurt a.M. (Insel) 1985, S.400
- 3) 1) の前掲書, S.13
- 4) Aschheim, Steven E.: *Nietzsche und die Deutschen — Karriere eines Kults*, Stuttgart/Weimar (Metzler) 1996, S.49

なぜなら、ニーチェ専門家は用心深く敬遠したからである。つまり、自分の名前がフリードリヒ・ニーチェの名と結び付けられると、学界でのその後の学問上の経歴に傷がつく恐れがあったからだ。それ以外にもまた、この大がかりな事業を推進するための資金が不足していた。その資金調達のために、エリーザベトはどれほどの果敢さと忍耐強さを強いられたことか。今日ではワイマールのニーチェ資料館は、あらゆる文化国家から熱狂的な大勢の若者が訪れるメッカとなり、高齢に達したエリーザベトは知識人たちからまるで精神界の君主のように崇められているが、もしかすると彼女は時おり満足感に浸りながらも、かつ、多少の哀愁を覚えつつ、ナウムブルクのあの小さな家のことを思い出しているかもしれない。⁴³⁾

エリーザベトは、ニーチェ・アルヒーフを1894年2月にまず母親の家に開設したが、同年9月には近所の借家にこれを移し、さらに1896年8月には華やかな文化都市ワイマールへの移転を果たし、そして最終的に母親の死後間もない1897年7月、ほとんど病臥のままの兄フリードリヒ・ニーチェを連れ立って、メータ・フォン・ザーリスが供与した別邸「ジルバーブリック」へ移転させた。その間、資料館所属の編集員を雇用してニーチェ全集の編纂作業を進め、『ニーチェ評伝』第一巻を執筆・出版し、ニーチェ伝を書き継ぐために1か月にわたって取材旅行(M.v.ザーリス, M.v.マイゼンブーク, J.ブルクハルト, F.オーヴァーベックなどに会っている)をするなど、自ら課した「もうひとつの大きな人生の課題」の「所業達成」のために、エリーザベトは全力を尽くした。問題はしかし、それら評価されるべき行動の裏に見られる策謀的、利己的行状の数々である。たとえば、エリーザベトはニーチェ著作権者である母親フランツィスカとニーチェの従兄A. エーラーにその権利の譲渡を迫り、強引に自らのものとした。⁴⁴⁾ また、ニーチェプロパガンダのための機関誌とすべく週刊雑誌「文学マガジン」の乗っ取り計画をもくろんだり(失敗に終わった)、好意で提供してもらったジルバーブリック邸を無断で大改修して、M.v.ザーリスの怒りを買うなど、その行動のひとつひとつに強引さと無謀さが際立っている。それはともかく、エリーザベトが開設したこのニーチェ資料館の最大の問題点は、しかし、これが公的機関ではなく、その運営と決定権がニーチェの身内の一私人に委ねられていたことにあるであろう。しかも、この一私人が名誉欲・金銭欲を含め野心たっぷりの、いずれにせよ「問題のある」パーソナリティーを持った人物であったことが、それ以後の資料館運営と、そして、ニーチェ学の展開に大きな瑕瑾を生む結果となった。Curt Paul Janzはその著『フリードリヒ・ニーチェ——評伝(全3巻)』(1978-9)において、そのことに関して次のような趣旨の言及をしている。つまり、エリーザベトの開設したニー

の項目が掲載された。

エリーザベトが、このような時流を鋭敏に認識して、一時帰国の際にすでに植民地経営に見切りをつけ、次なる大きな野望を決意したことは、以下のような具体的な事実からも証明できる。すなわち、エリーザベトは当初1年間の予定であった一時帰国を半年間延長して、ニーチェの著作の出版に係わるさまざまな指示を出している。「神を冒瀆している部分がある」という理由で『ツァラトストラ第4部』の出版に待ったをかけたり、グスタフ・ナウマンとのあいだにニーチェ全集出版の合意を取りついたり、また、それまでニーチェ著作を発行してきたフリッチュ、シュマイツナー、ナウマンの出版人からは、出版の版数と売上額の正確な数値を挙げさせたりしている。1892年6月再びパラグアイに戻るが、エリーザベトはフェルスター農場や家屋・家具類一式をフランケンベルク出身のある男爵に売却し、1893年9月、最終的に故国の人となった。

エリーザベト・フェルスター・ニーチェが、病魔に犯された兄とその介護を務める母親の住むナウムブルクのニーチェ家の一室に、「ニーチェ・アルヒーフ」を開設したのは、パラグアイから帰国後わずか半年足らずの1894年2月のことである。そのささやかな資料館には、ツァラトストラの従者である鷲と蛇をあしらった紋章入りの原稿収納箱が置かれ、エリーザベトが収集保管していた数々の資料やニーチェの所蔵本などが陳列された。このアルヒーフの設置を機に、エリーザベトは文字どおり精力的に、いまだあちこちのニーチェの知人たちの所有になっているニーチェの書簡や草稿などを、時には相当の代金を支払ったりしながら、収集と保管にこれ努めた。また、敬虔な母親フランツィスカが、息子の瀆神的な手書き原稿を焼却処分しようとするのを押しとどめて、ニーチェの著述が「決して家族の者の所有ではなく、社会に還元されるべきもの」⁴²⁾であることを説得したのも、ほかならぬエリーザベトであった。

資料館設置を立案・運営するに際してエリーザベトがさまざまな難問に当面しながらも、それらを周到に克服していった状況などについて、エリーザベトの知人である小説家 Gabriele Reuter (1859-1941) は、1921年に出版した自叙伝『子供から大人へ——私の青春の履歴』の中で、次のような回想をしている。

「この勇敢なエリーザベトという女性が、彼女のめざす所業達成のためどんなに極度の困難と闘わなければならなかったかについては、今となっては誰ひとり想像もできないくらいである。エリーザベトはとりあえず、ほとんど判読不可能なニーチェの原稿の解読作業をまっとうできる助力者が必要であったが、当初はそのための学識ある学者すら見つからなかった。

ザベトにしてみれば、わずか半年足らずのあいだに彼女の最大の精神的支柱である二人を相次いで失うことになる。

エリーザベトはパラグアイにおける遺業を引き継いで事態の収拾にあたるが、1890年12月に一時帰国して、非難の的になっている亡夫の名誉回復のために著書『ベルンハルト・フェルスターのパラグアイにおける植民地〈新ゲルマーニア〉』（1891）を出版したり、緊急事態にある植民地事業の救済を求めるためのプロパガンダ活動に奔走した。しかし、恐らくエリーザベトの意識の底では、すでに日を追うごとにその事業継続よりも兄ニーチェの「精神的遺産」へ向かって関心が大きく移行して行ったことは、疑いえない事実である。次に示す一文は、その数年後の1894年に『バイロイト通信』誌上において表明されたエリーザベトの言葉である。

「(私の) もうひとつの大きな人生の課題。かけがえのない哲学者であるたった一人の兄ニーチェの世話をしながら、兄の著作を管理し、また、兄の生涯と思想とを著述するという私の任務が、今後、私の全生涯と全精力を要求する。——従って、植民地の件については、今や見切りをつけざるをえない。」⁴⁰⁾

興味深いことに、エリーザベトはそれまで自分の姓名を Elisabeth Förster ないしは Eli Förster と記していたが、この時以降は、Elisabeth Förster-Nietzsche の名を用い、旧姓 Nietzsche を復活させていることである。法的手続きを取った末の改名ではあるが、そのこと自体、以後エリーザベトが全力をあげて取り組むことになる「もうひとつの大きな人生の課題」への意気込みを、端的に物語っているようにも思われる。

エリーザベトが兄フリードリヒ・ニーチェの「精神的遺産」に直接的に関わり合うことになった時期は、まさに巷間におけるニーチェへの関心が高まろうとする兆しが見え始めた時期である。何事にも目ざとい、しかも、商才という点でも捨てがたい才能を持ち合わせているエリーザベトは、直観的に兄ニーチェの思想の将来性を見抜いたに違いない。

先述のとおり、正常な精神にあった限りのニーチェはほとんど世間の反響を呼ばず、皮肉にもニーチェが狂気の淵に陥った数年後から、急速にその名声が広がっていった。Karl-Heinz Hahn によれば、「ニーチェが精神的に崩壊した1889年には、ニーチェの名はせいぜい消息通のあいだで話題にされていたにすぎず、当時はまだ一般には広く名を知られた存在ではなかった。ところが、その後数年にして状況はがらりと変わった。」⁴¹⁾ ちなみに、1894年刊行の『ブロックハウス百科事典(第14版)』に、簡潔な説明文ながら初めて「ニーチェ」

発作のために病死した、と言いふらした。

さて、兄フリードリヒと妹エリーザベトのあいだには、きょうだいとしての情感のかよいはあったとしても、その思念的な軋轢はいかんともしがたく、たとえば、1887年12月末に書きとめられた次に示すニーチェの妹宛書簡の下書き（従って、投函はされていない）には、ニーチェの胸のうちにくすぶる焦燥感と憤りの念が率直に表明されている。

「私は自分が反ユダヤ主義者の下種な人間どもと混同されないように、今やあらゆる手段を講じて、自己防衛をしなければならない破目になった。私の実の妹、かつての妹が（中略）最も呪うべきその契機を作ったとなつては。反ユダヤ主義の機関誌にそもそもツァラトウストラの名が載っているのを読んで、ついに私の堪忍袋の緒が切れてしまった——私はおまへの夫の属する党派には反対の立場だ、それはまさに正当防衛というものだ。呪われたそれら反ユダヤ主義者の愚か者たちには、私の理想像に指一本触れさせないつもりだ！

われわれふたりの名前は、おまへの結婚によってこの反ユダヤ運動と混同されてしまっているが、私はそのことでこれまでどんなに苦悩していることか！おまへはこの6年のあいだに、理性も思慮深さもすっかり失くしてしまった。」³⁷⁾

総じて、ニーチェの表現形態には、意図して過激な攻撃的文体が認められ、決してここに引用したような激情が恒常的なエリーザベトに対するニーチェの気持ちだったとは限らない。もともとニーチェは、生涯にわたって妹想いの一面をのぞかせ、「親愛なるラマ」のことは決して頭から離れることはなかったであろう。にもかかわらず、この時期における兄と妹のあいだの心の疎隔と考え方の落差は、覆いようがない。その事実を最も如実に示すのが、コペンハーゲン大学ゲオルク・ブランデス教授をめぐる兄妹のあいだの決定的な齟齬であろう。³⁸⁾ 大学における連続講演において自分の哲学が論じられることに狂喜する兄に対して、妹はブランデス博士がユダヤ人であるという理由だけで中傷誹謗した。ニーチェは怒り心頭に発して、妹宛てに次のような書簡下書きを書き残している。「妹よ、私はおまへの手紙を受け取り幾度も読んだあげく、おまへと決別すべき重大な必然性に迫られていることを知った。私の運命が決定的になった今、私宛てに書いたおまへの一語一語は十倍にも鋭く私の胸に突き刺さる……。」³⁹⁾ そして、それから4か月後の1889年1月3日に、ニーチェはイタリアのトリノの街頭で昏倒し、そのまま死を迎えるまでの以後十年のあいだ、精神の闇夜の中をさまよう運命に陥った。フェルスターが事業の行き詰まりを苦にして服毒自殺をしたのは、それからわずか5か月後のことであり、エリー

と世間に与える影響についての私の目論見を、何もかもご破算にしてしまう。ワグナーと私を敵対関係に追い込んだのもこの反ユダヤ主義であったし、私と妹の間の完全な亀裂の原因も、この反ユダヤ主義にほかならなかった。」³⁰⁾

そう言えば、1885年5月22日に催された妹エリーザベトとベルンハルト・フェルスターの結婚式に、ニーチェはあえて口実をつくって欠席した。根っからの国粹主義者でありアンティセミティストであるフェルスター（博士）は、1881年に25万人以上の署名を集めた反ユダヤ請願書を国会に提出したり、ギムナジウム教師でありながら生徒に過激な反ユダヤ主義思想を扇動して教師の職を追われるなど、義兄ニーチェの眼から見て、いかにも「軽率きわまりない」人物であった。1885年5月末に母親フランツィスカに宛てて、ニーチェは書いている。「私のものの考え方からして、あのような扇動家と親しく接するなんて、とてもできません。向こうもどうやら、同じ気持ちのようです。」³¹⁾

ところが、驚くことに、エリーザベトは兄のそのような態度を知っておりながら、夫ベルンハルトへ宛ててまったく出鱈目な手紙文を書き送るのである。1885年9月13日付の便りには次のように書かれている。

「フリッツはあなたが大変気に入っており、私たちの植民地計画にとっても関心を寄せています。兄もいずれそのうち私たちのあとを追ってパラグアイへ来るだろうと、私は確信しています。昨日は、私たちが兄の財産を勘定したところ、総額4500ターラーありました。これはちょっとした投下資本です！」³²⁾

しかし、ニーチェが妹夫妻のあとを追って南米へ赴こうとした形跡などまったく認められず（むしろ、ニーチェはエリーザベトに宛てて、「たとえ十頭の馬を連れて来たところで、私をパラグアイへ引っ張って行くことはできない」³³⁾、と書き送っている）、そしてまた、妹の資金調達の要求に対してもニーチェはきっぱり拒絶しているのである。（マッキンタイヤーによれば、「近親者のなかでかたくなに植民地への投資を拒んだのはニーチェただひとり」³⁴⁾ だった。）——ところで、上記の引用文にみられるような事実をねじ曲げる虚言癖ないしは誇張癖は、エリーザベトが故国へ宛てて書き送った「ばら色の」パラグアイ報告にも多々見られるが、そのような性癖こそ（マッキンタイヤーはこれを評して、「エリーザベトの見事な誇張の能力³⁵⁾」、「ほとんど誇大妄想にまで達してしまったフェルスター夫人の病気³⁶⁾」、と言っている）、次節で述べるように、エリーザベトのさまざまなスキャンダルを生む最大の下地になっているかもしれない。そう言えば、夫ベルンハルトがストリキーネとモルヒネを用いて服毒自殺をしたにもかかわらず、エリーザベトはその事実を伏せて、神経性

ト教の雰囲気が熱っぽく支配する教養俗物たち（Bildungsphilister）の社交場にはかならなかった。そのような濛気に浸るエリーザベトにとって、兄の示した新しい思想的展開は、まったく不可解なものであり、とりわけ、キリスト教に対する公然たる批判が大きな衝撃であったことは言うまでもない。エリーザベト（ならびに敬虔なプロテスタントの母親フランツィスカ）とニーチェとのあいだには、その後次第に険悪な空気が流れ、互いに対する露骨ななじり合いの言葉が吐露される事態となる。1882年秋に書かれた遺稿の一節に、ニーチェは次のように書いている。

「母や妹のようなタイプの間が、私にとっての紛れもない敵対者であることは、とくに承知済みだ——（中略）そのような人間の風下に置かれては、私の空気は台無しである。」²⁸⁾

一方、妹エリーザベトのほうでも、兄の「恥知らずな」思想展開に深く「絶望」すると同時に、あらゆる意味で兄の反対像とも言うべき婚約者フェルスターをわが理想像として思い描いている。エリーザベトの1883年4月4日付の母親宛て書簡を引用する。

「反キリスト者などと！私は身の毛がよだつ思いです。私はすっかり絶望しました。フリッツの考え方に私は次第に共感できなくなってきました。だって、兄さんの見解がそもそも少しでも誰かのためになるのか、私には疑問に思われてなりません。母上、せめてフリッツが、フェルスターと同様の見解を抱いてくれたならと思います。あの人には、私たちがもっと善良になり幸せになるための促しと、それに従わせる理想というものがあります。」²⁹⁾

兄妹のあいだの心のかよいが際立って疎遠になり、二人の信頼関係はこの頃を境にして急速に冷めていく。そして、エリーザベトはやがてフェルスターの唱道する反ユダヤ主義活動にのめり込み、ついには、夫と共に「ユダヤ人の血に汚されていない」南米パラグアイの奥地に入植して、理想郷「新ゲルマーニア」の建設に情熱をそそぐことになる。（その間、エリーザベトは持ち前の行動力を発揮して夫の事業遂行を助け、一説によれば、むしろ夫以上の働きぶりを示した、との指摘もある。）妹のこのような行動や考え方、また、義弟フェルスターという人物に対して、ニーチェがほぼ一貫しておぞましい思いを抱いていたことは、この時期におけるニーチェの書簡からも明らかである。次に引用する1884年4月2日付けのオーヴァーベック宛の手紙には、偏狭なアンティセミティズムに対する憤怒の念と、言論人としての自分に及ぶであろう世間の誤解に対する不安が如実である。

「この忌々しい反ユダヤ主義は、私の経済的自立、私の弟子や新しい友人

1883年に婚約、1885年に結婚)、(2)ニーチェを激怒させたと言われる1882年のいわゆる「ルー事件」(Lou-Affaire)におけるエリーザベトの出すぎた介入と陰険な策謀(余りにも深い失望のため、ニーチェは自殺まで考えた²⁵⁾),さらには、特に見過ごすことのできない理由として、(3)エリーザベト自身の「自立への道」の手探り(マイゼンブークの助言もあり、この時期にエリーザベトは兄の「援助者」という立場から脱皮すべく、家庭教師を務めるためのフランス語修得を志したり、文筆活動をめざして小説執筆を試みたりしている²⁶⁾),などの局面が考えられる。しかし、それら以上に決定的な要因として、兄と妹(この点に関しては母親フランツィスカもエリーザベトの同調者である)のあいだにおける思念的な疎隔を見落とすわけにはゆかないだろう。

ニーチェの思想の展開は、たびたび指摘されるように、(1)ショーペンハウアーとギリシア古典とワーグナーの思想圏域で自己を展開した浪漫主義的な第1期、(2)「自己への帰還」を果たして、「自由な精神」として鋭い文化批判・時代批判に立ち向かった第2期、(3)自己への収斂をいちだんと強めて、深遠な啓示的思想を示唆した第3期、という三つの時期に区分することができる。ニーチェは遺稿著作『この人を見よ』(1908)の中で、その第2期への転回点を、以下のように的確に自己分析している。

「私は、自分に対するある種の苛立たしさに襲われた。今こそ再び自己に思いをいたす時が来ていることを、私は認めた。すると、やにわに恐ろしいまでに、私にははっきりしてきたのだ。(中略)——自分の使命に照らしてみると、文献学者としての私の存在全体がいかにも無益で気紛れであったか、ということが。私はこの誤った謙遜さに恥じ入った。……過ぎ去ったここ十年のあいだ、私の精神の栄養摂取はそもそも全体的に停止していたのだ。」²⁷⁾

こうしてニーチェは、『人間的なあまりに人間的な』の刊行の翌年(1879年)、十年間勤めたバーゼル大学を依願退職するが、そのことは同時に、「紙魚の学問」である文献学と「もぐらのような」文献学者としての生業から解放されて、その後の痛烈な時代文化批判と価値転換思想の表明に向かうニーチェの決定的な転換期を意味していた。

ニーチェがワーグナーに幻滅し(ニーチェとワーグナーの関係については、稿を改めて論じる必要がある)、ワーグナーとの決別の書である『人間的な』を出版したとき、エリーザベトのほうはいぜん熱烈なワーグナー崇拜者として、ワーグナー邸に出入りしていた。そして、狂信的なワーグネリアンたちの参集するそこはと言えば、帝国ドイツ的な民族主義、反ユダヤ主義、偽善的キリス

が恩師リチュル教授から『ライン文献学誌』全24巻の索引目録作成を依頼されたとき、エリーザベトは兄を手伝って、1か月以上にわたるこの難渋な作業に携わり、見事に仕上げた。ちなみに、ニーチェは1870年に自費出版した小冊子『ホメロスと古典文献学』に、「文献学の刈りあと畑における勤勉な協力者であるわが愛するたったひとりの妹エリーザベトへ」(Meiner teuren und einzigen Schwester Elisabeth als der fleißigen Mitarbeiterin auf den Stoppelfeldern der Philologie) という献辞を刷り込んで、妹の助力に感謝の念を表している。²⁰⁾

よく知られるように、ニーチェは、頭痛・けいれん・嘔吐・眼病などに悩まされる病身の独り者であったが、エリーザベトはそのような兄の身の回りを、あれこれと(家計簿をつける仕事まで)世話して、長年にわたりハウスキーパー的な役割をも果たしている。特に、ニーチェがバーゼル大学の教授職にあった十年間には、たびたびナウムブルクから遠路バーゼルへ馳せ参じ、長期間にわたって兄フリードリヒと起居を共にした。具体的に記せば、1870年に約4か月、1871年に約6か月、1872年および73年にそれぞれ3～4か月、1874年および75年は夏季休暇のあいだ、そして、1875年8月から76年3月まで、1877年9月から78年6月までのあいだ、といった具合で、この間エリーザベトが兄と生活を共にした期間の合計は、ほぼ3年半の長きにわたっている。²¹⁾ おそらく兄ニーチェは、頑迷で勝気なこの妹²²⁾ にときおり辟易したり、気分を害されることもあったと思われるが、「頭の回転が早く」²³⁾ 「家政の切り盛りに長け、料理も上手な」²⁴⁾ 妹エリーザベトは、兄フリードリヒにとってなくてはならない存在であり、何くれとなく生活の面倒を見てくれる一番身近な心の支えであった。エリーザベトにしても、兄との「刺激的な会話」に充足感を覚え、否それ以上に、兄の存在はいわば彼女の生きがいの一斑をなしていたとさえ考えられる。特に、敬愛するその兄が24歳という異例の若さでバーゼル大学教授に抜擢されたとき、エリーザベトはわがことのように喜び、自分もその榮譽の一端にあずかろうとするかのように、上述のごとく頻繁に兄のもとに留まって、献身的に兄の秘書役・家政婦役・看護人役を務めた。気が強く、出しゃばり気味のエリーザベトのことゆえ、むろん、その同居生活中に鎖末な次元における感情的な齟齬や、日常的レベルでのいさかいはなかったとしても。

ところが、1876年～1877年頃を境として、エリーザベトの兄に対する姿勢に、判然とした変化が認められるようになる。その背景をなす理由としてはさまざまな契機が挙げられようが、具体的には、(1)エリーザベトがニーチェの反対を押し切る形で、反ユダヤ主義運動のリーダーであるベルンハルト・フェルスターと親交を深めていった事実(両人は1877年にワグナー邸で知り合い、その後

(beinahe lückenlos)』¹⁴⁾ 大量に残されていることから、およそ肯けることである。エリーザベトは長じてからも生涯を通じて、兄の原稿や書簡、譜面、文献学の研究メモや講義ノート、その他家計簿や領収書の類まで細々と収蔵したと思われる。むろん、このような事情の背景には、ニーチェが病氣療養のため各地を転々とする生活を余儀なくされ、ニーチェの草稿や諸々の資料が散逸することを、当人以上に妹のエリーザベトが危惧したということもあるであろう。

なにしろ、ニーチェの遺稿は膨大な量にのぼると言われる。¹⁵⁾ 厚表紙付きの草稿メモノート64冊、1870年から1889年にかけて書かれた書簡下書き等のノート46冊、バーゼル時代の講義原稿や『悲劇の誕生』と『反時代的考察』の構想メモノート47冊、約1600通の書簡（そのうち854通が母親および妹宛て）、作曲のための腹案メモ、学校時代の作文や覚え書（無綴じ原稿1500枚）、大学生時代の講義録23冊、古典文献学関係の原稿（800枚）等々が残されているという。¹⁶⁾ エリーザベトは後年になって（1894年）、ニーチェ資料館を創設することになるが、その情熱の一端はすでに早い時点から発揮されていたと見て差し支えないだろう。そう言えば、エリーザベトはその著『若き日のニーチェ』（1912）の一節に、「ニーチェ資料館に収集されている途方もなく豊富な収蔵品は、私が一人でこつこつ集めたものにほかならない」、¹⁷⁾ と自負して語っている。

ニーチェの原典資料収集におけるエリーザベトの功績について、Karl-Heinz Hahn は論文「ニーチェ資料館」（1989）において、次のように高い評価をしている。「ニーチェ手書きの遺稿については、ほぼ脱漏がないほどに完結していることが際立っているが、そのような事情に関しては、なにより妹エリーザベト・フェルスター・ニーチェの恩恵を蒙っている。エリーザベトの名が挙がると必ずや発せられる種々の批判がたとえ正当な批判だとしても、エリーザベトが倦まずたゆまずニーチェ資料を収集し、捜し出した事実、また、まるで憑かれたように取得可能な限りの資料を一所に収納すべく骨身を惜しまなかった事実は、十二分に斟酌されてしかるべきである。」¹⁸⁾

さて、ニーチェにとってエリーザベトは唯一のきょうだいであったこともあって、自分の内心を吐露できる格好の話し相手であり、実のところふたりは「非常に気の合う兄妹」であった。H.F.Peters の叙述によれば、若い二人は美術館や劇場に腕を組んで姿を見せ、「まるで婚約中の若い男女のようであった」、という。¹⁹⁾ エリーザベトは兄の出色の英才を非常に誇りにし、その「兄に対する度を越した崇拜」は、彼女の仲間内ではつとに有名であった。ニーチェがやがて20代半ばで古典文献学の学究の道を歩み始めると、エリーザベトは兄の論文・著書の原稿整理などを手伝い、まめな助手役を務めた。たとえば、ニーチェ

Federico Gerratana はある書評文（1995）において、ニーチェ著作として出版された『力への意志』に関して、「エリーザベトはニーチェの原典資料を（中略）いわば原料として取り上げ、吟味し、値ぶみして加工を施し、そのような手法でニーチェの精神的遺産を〈著書として〉仕上げ、公示した。ニーチェ資料館の精神からのこの著作の誕生は、いずれにせよ、イデオロギー的自閉症の人々に供せられたドイツ教訓詩である」¹¹⁾、と含みの多い風刺的な評言を呈している。（言うまでもなく、「ニーチェ資料館の精神からのこの著作の誕生」という言い回しは、ニーチェの処女作『音楽の精神からの悲劇の誕生』のもじりである。）

いずれにせよ、エリーザベト・フェルスター・ニーチェはニーチェの実生活のみならず、ニーチェの原典管理やニーチェ研究の歴史などさまざまな側面に、決定的な係わり合いを持ち、結果的にニーチェ受容の歴史に功罪織り混ぜて大きな足跡を残した。そのような意味で、H.F.Peters は、ニーチェ研究という次元におけるエリーザベトという存在の重要性を示唆して、「ニーチェとその妹の生涯は、きわめて密接にからみあっていたがゆえに、両者の一方について、もう一方と関連づけることなく論述することは、とうてい不可能である」¹²⁾、と述べている。現今、人物評伝を中心とした研究アプローチがやや疎んじられていることに稿者はむしろ反目して、以下の論述を進めていくことにする。

2 兄妹のあいだの関係について

ニーチェより2歳年下の妹エリーザベトは、すでに子供の頃から、密かに兄フリードリヒ（愛称フリッツ）の草稿を機会あるごとに収集して、自分の宝物入れ（Schatzkammer）に収納する習慣があった。エリーザベト自身の言葉を引用しよう。

「子供の頃私は、〈宝物入れ〉と呼んでいた目にも鮮やかな小さなチェストを持っていたが、私はその中に、兄がいずれ破棄しようと放置していた原稿をこっそり集めておいた。年月が経つ間に、それはかなり大きな木箱に取り替わっていた。私はその大箱を兄に見せて、今後は焼却などしないように頼み込み、兄へ手渡した。兄は箱の中身を見てびっくりし、深く感動して、〈私の青春のすべてだ〉と言った。兄自身は、このような原稿の存在をほとんど忘れていたのだった。」¹³⁾

もともと才気走った性格の、何事にも熱中するエリーザベト（愛称リースヘン）が、敬愛する兄フリッツの草稿や覚書き、ノートの類などを後生大事に収集保管していた事実は、ニーチェ若年の頃の遺稿が「ほぼ完璧に近いほど

トのさまざまな背信行為が挙げられる。エリーザベトはまず、1895年からケーゲルを編集者にして初のニーチェ著作集を、1894年からは通常グロースオクターフ版と呼ばれる全16巻のニーチェ全集を、1920年からは全23巻のムザリーオン版をそれぞれ出版した。(それと並んで、1900年からは全5巻のニーチェ書簡集も公刊された。)しかし、『力への意志』の編纂をはじめとして、ずさんさの目立つ、不備不完の全集であった。特に、ニーチェ書簡集には数多くの改ざんや隠蔽が含まれており、信頼に耐えるニーチェ全集・書簡集の出版が期待されたが、なにしろエリーザベト存命中はあらゆる資料がエリーザベトおよびその後継者の監視のもとに置かれていたし、第二次世界大戦後は、先述のとおりニーチェ資料館の閉鎖によって、原典照合への道が閉ざされてしまい(なお、1954年から56年にかけて Karl Schlehta が全3巻の新しいニーチェ選集を出版して、「画期的」との評価を受けたが、この編纂はニーチェ資料館の原典資料に直接あたったものではなかったし、その編集方針や補遺に掲げられたニーチェ解釈などに種々の問題点もあり、激しいニーチェ論争を引き起こす契機となった⁹⁾)、結局のところ「原典資料に基づく、信頼するに足る」ニーチェ全集の編纂は、1967年から刊行が開始されて現在もなお続刊中である Giorgio Colli ならびに Mazzino Montinari (ふたりはイタリアのマルキスト) 両人による浩瀚なグロイター版『ニーチェ全集』(2000年頃に完結の見込、ただし主要なものは現在ほぼ出版済み)を待たなければならなかった。すなわち、少なくともニーチェを研究対象として取り扱う場合の、厳密な意味で信頼できるニーチェ全集(宣伝パンフレットの言葉に従えば、「学問的に信頼しうる唯一、完璧な歴史的・批判的出版」)は、今にしてようやく私たちの手に供される段階を迎えた、ということにはほかならない。なにしろ、ニーチェの著作はそのほぼ半分が遺稿によって占められており、それらの原稿や未定稿や走り書きなどを綿密な文献学的研究に基づいて出版にこぎつけるためには、ほぼ半世紀の歳月を必要としているわけである。なお、G.Colliは1979年に、M.Montinariは1986年に、それぞれ他界したので、現在はそのあとを受けて Wolfgang Müller-Lauter および Karl Pestalozzi が中心になって刊行作業を進めている。

以上のごとく、ニーチェ受容の歴史という局面ならびにニーチェ第一次資料の紆余曲折という局面においては、他に類例を見ないほどの度しがたい暗部と大きな欠落部分とがある。David Marc Hoffmann は、特にエリーザベト・フェルスター・ニーチェのいかがわしい陰謀的な行為に関し、「人文科学の分野では例を見ないほどの醜聞」¹⁰⁾と、厳しい批判の矛先を向けた。また、

はじめとして、エリーザベトの経済的支援者であったケスラー伯に関する研究書やH. F. Peters 著『ツァラトゥストラの妹——フリッツ・ニーチェとリースヒェン・ニーチェ——あるドイツの悲劇』（1983）、Ben Macintyre 著『忘れられた祖国——エリーザベト・ニーチェの足跡』（1994）など、最近になって、ニーチェ資料館の実態やエリーザベト・ニーチェの実像を跡付ける研究文献が、相次いで出版されている。しかしその一方では、エリーザベトの実像を探るうえで是非とも必要なエリーザベト書簡集はいぜん未刊のままであるし（H. F. Peters は上記の著書で、未公開のエリーザベト書簡を数多く引用している）、エリーザベトに係わる射照に極めて大きな意味を持つはずの『F. オーヴァーベックとP. ガストの往復書簡集』は、いま編纂中との予告はあるものの、現時点においてはまだ発刊に至っていない。これらの資料の早い時期における出版が望まれる。

序でながら記せば、エリーザベトが自立の道を考えて1880年代初めの頃に、小説執筆を試みた事実は知られていたが、その原稿（未定稿）の存在については従来、研究者のあいだで確認されていなかった。ところが、最近になってこれがゲーテ・シラー資料館において発見され、Roswitha Wollkopf によってその私小説まがいの作品について、執筆動機や内容と意義などが論文の形で1994年に公にされた。

ところで、ニーチェの生地レッケン（旧東ドイツ）の町では、遅まきながらつい3年前（1994年）の10月15日、ニーチェ生誕150周年を記念して、ニーチェ記念館がオープンした。開設の式典に前後して、ニーチェ学会やニーチェにちなむ朗読会、展示会など多彩な催しが繰り広げられたが、ニーチェ墓前における館長 Hans Martin Gerlach 博士の式典挨拶には、次のような言葉が含まれていた。「ニーチェの教説の遺産は、ニーチェが精神的・肉体的に終焉したあと後世の人々によって、ほかならぬドイツの地において無惨にもイデオロギー的に悪用されたために、私たちはニーチェを完膚なきまでに記憶のうちから抹殺してしまう破目に陥りました。ようやく1989年ないし1990年以後になって、当地の人々は、こんにち世界で最も有名とも言えるこのドイツの思想家の生涯と思想を、再び文化的忘却のふちからよみがえらせるべく、多面的な働きかけに骨身を惜しまなかったのであります。」⁸⁾

多少の比喩的誇張を厭わずに言うならば、二十世紀を代表する思想家ニーチェは、この世に生を享けて150年目にしてようやくこの日、故郷に錦を飾ったということになるであろう。

さて、ニーチェ研究の展開におけるもうひとつの大きな歴史的障害は、ニーチェ資料館によって推進されたニーチェ全集・書簡集公刊におけるエリーザベ

チェをドイツ破局の先導者とみなして、ニーチェに対し徹底して拒絶の態度を取った。』⁵⁾ 同様の指摘は、Manfred Riedelの近著『ワイマールにおけるニーチェ——ドイツの劇的事件』(1997)の中の、次のような言及にも見られる。「当初はドイツ民族主義者たちによって、そのあと今度は民族社会主義者たち(ナチス)によって、ニーチェは悪用されたのである。(中略)それゆえに、ニーチェが意図した哲学の一切は、1940年代に至るまでまったく正反対の方向に歪曲されてしまった。』⁶⁾ (ニーチェの思想が歪曲化され悪用された背景については、後述する。)

さて、「ジルバーブリック」の愛称を持つニーチェ資料館が、晴れて再開の日を迎えたのは、つい先年の東西両ドイツ統一の翌年(1991年)のことである。現在、ニーチェの原典資料はまだゲーテ・シラー資料館の収蔵資料のひとつとして保管されているが、ニーチェ資料館そのものは、ようやくにして公共の利用が可能となった。エリーザベトが、ナウムブルクのニーチェ家の一室に、ささやかなニーチェ資料館(この段階では「ニーチェ文庫」と呼ぶほうが語感的にはふさわしい)を開設したのが1894年であるから、それから数えてほぼ百年の歳月が流れている。

ちなみに、ニーチェ資料館に保管されている資料のうちには、まだかなり未公開の資料も含まれていると言われる。特に、若年期における遺稿など、その全容が日の目をみるのもいずれそう遠くはないであろう。Jochen Golz編著の『ゲーテ・シラー資料館 1896-1996年』(1966)のなかでVolker Wahlは、今後におけるニーチェ研究事情の見通しについて、次のように論述している。「ニーチェ資料館に収蔵されているエリーザベト・フェルスター・ニーチェの遺稿に関する学術的な解明は、これから段階を追って進められるはずである。フォルクスワーゲン財団の助成金による企画である(ニーチェ資料館の)資料の整理とそのリスト化は、二十世紀文化史にとってきわめて重要なこの収蔵文書を、今後、分析的究明の道へ向かわせるに違いない。』⁷⁾

なお、ニーチェ資料館やエリーザベト・フェルスター・ニーチェをめぐる研究書の公刊が最近目立って多い。ニーチェ資料館に関する初の本格的な研究書であるDavid Marc Hoffmann著『ニーチェ資料館の歴史について』(1991)、同じ著者による『R. シュタイナーとニーチェ資料館』(1993)、エリーザベト研究には不可欠のAndreas Petzer編著『F. オーヴァーベックとE. ローデの往復書簡集』(1990)、ニーチェの母親FranziskaがA. Oehler(ニーチェの従兄)に宛てて書いた書簡集『禁治産宣告を受けた哲学者』(1994)などを

のちに詳述するように、エリーザベトは、夫ベルンハルト・フェルスター（1843-1889）とともに、南米パラグアイの奥地で反ユダヤ主義活動の一環として、共同体「新ゲルマーニア」の建設に夢を賭けるが、数年のうちにその事業は行き詰まり、夫ベルンハルトの服毒自殺という事態をもって終焉する。失意のもとに故国へ戻ったはずのエリーザベトは、いちはやく次なる事業に大いなる情熱を傾注した。すなわち、ニーチェ資料館を創設し、ニーチェの著作権を強引に自らの掌中におさめ、脇目もふらずニーチェ・プロパガンダ活動に身を入れた。ニーチェ資料館をほぼ独裁的に支配して、ニーチェ全集や書簡集、ニーチェ評伝などを相次いで出版したが、前者は遺憾ながら文献学的にみて問題の多い編纂であり、一方、後者のニーチェ論述や評伝も誇張的な筆致でもって彩られており、ニーチェ像を多分に歪曲化・神聖化したものであった。かつまた、エリーザベトは、ニーチェの思想を当時の「息のつまるような国粹的な濠気」の内に引きずり込んで、民族精神高揚のための具に供した。当時の権勢者であるワイマール大公やヒトラーをニーチェ資料館へ招へいして世間の耳目を集めたり、エリーザベト肝いりのニーチェ朗読会、講演会・晩さん会などを頻繁に催して、ニーチェの思想の「通俗化」に努めた。と同時にまた、A・ジード、A・フランス、G・ダヌンツィオ、H. G. ウェルズなどの著名な文化人たちを引き入れる形で、ニーチェ神殿やニーチェスタジアム建設の計画を練るなど、⁴⁾ニーチェ哲学の「神話化」を演出することも忘れなかった。（その建設計画は、第一次世界大戦の勃発のため頓挫した。）結局、第二次世界大戦終結に至るまでその事態は継続し、ワイマールのニーチェ資料館は、ニーチェの思想を軍国主義、帝国主義のモットーのもとに取り込むメッカとしての役割を演じることになった。しかるに、1945年のナチズム国家崩壊によって、ニーチェの思想はようやく長年の右派イデオロギーの呪縛から解放されるわけだが、折しも今度は、左派イデオロギーによるニーチェ断罪にさらされる破目に陥る。すなわち、「ファシズムに利用された哲学者ニーチェ」のレッテルを貼られてニーチェは再び歪んだ把え方をされる結果となる。具体的に言えば、ニーチェ資料館が設置されているワイマールが東ドイツに属することになったため、ニーチェは社会主義・共産主義の仇敵とみなされ、ソ連駐留軍の命により、ニーチェ資料館はゲーテ・シラー資料館（同じくワイマールの地にある）に組織上併合されて、ニーチェの原典資料に関しては遺憾ながら閉鎖の措置がとられた。Mazzino Montinariはその著『フリードリヒ・ニーチェ——序説』（1991）において、上述のことに関連して次のように述べている。「ファシストやナチ黨員たちは、たびたびニーチェに（思想的な）拠所を求めており、従って、第二次世界大戦後になると、G. ルカーチを指南役とするマルキストたちは、ニー

また、後年においては、ファシズムの権力者たちに取り入るなど、さまざまな過失や策謀的行為を重ねた。(これらの点については後述する。) そのようなエリーザベトのスキャンダラスな行状については、一部の人々によって早い時期から個々に糾弾されてはいたが、エリーザベトはニーチェ原典資料の「聖堂」(ベン・マッキンタイアーはそう呼んでいる)に長年にわたって君臨して、ニーチェを言わば「独り占め」し、ニーチェの思想の骨格を民族精神高揚の旗幟として仕立てることに力を貸した。そのことに関連して、Klaus Gochは次のように述べている。「エリーザベトは最後の最後まで、みごとに自らの役を演じきることに成功した。とにかく彼女は、文献学的手法やイデオロギー批判の手法を用いて歴史的眞実に加担しようとする人々の敵対さえも押え込んで、しかるべく作りあげられたニーチェ伝説を、終始守りぬくことができたのである。」²⁾ エリーザベトは結局、ナチスが覇権を獲得した2年後の1935年に90歳を目前にして大往生したが、晩年にはイエーナ大学より名誉文学博士号を授与されたり、三度にわたってノーベル文学賞受賞候補者に推挙されるなど、ニーチェ当人のお株を奪うほどに名声を博して、時の人としての権勢をふるった。Heinz Frederick Petersはこの「超人的な」エリーザベトをいささか揶揄的に〈ツァラトゥストラの妹〉と呼んで、次のように言う。エリーザベトは、「ピスマルクからヒトラーに至るまでの期間、ドイツの文化生活ならびに政治生活に重要な役割を演じた」³⁾。ちなみに、エリーザベトの死に際して、ドイツの新聞・雑誌はこぞって彼女を〈不撓不屈のドイツ精神唱道者〉として讃え、また、〈ヨーロッパにおける第一級の女性〉と評して、賛辞を惜しまなかった。そう言えば、ドイツ総統ヒトラーは私人の立場でエリーザベトの葬儀に参列し、自らその柩に月桂樹の花輪を供えた、という。

さて、エリーザベト・フェルスター・ニーチェの果たした役割の功罪については、その存命中から現在に至るまで、いろいろな毀誉褒貶の声が呈せられてきたが、そもそもこの「議論の余地のある、非凡な才能の女性」(ペーターズ)であるエリーザベトの実像については、後述するように第一次資料の封印ということもあって、近年に至るまで必ずしも白日のもとに晒されなかったうらみがある。ところが最近相次いで、エリーザベトの織り成した「ニーチェ伝説」の実態や「ニーチェ像歪曲」の経緯などに関する資料や研究論攷が公にされ、その全貌が徐々に解き明かされつつある。管見の限りでは、これらの問題に関する究明は、いま新たな段階を迎えつつあると言っても決して過言ではない。

では、如上の問題の究明がなにゆえにこれほどまで遅滞したのか、その原因について、ひとまずその大要を確認しておく必要があるだろう。

* * *

ニーチェ資料館と エリーザベト・フェルスター・ニーチェ(I)

恒 吉 良 隆

1 はじめに

本稿は、ニーチェ^{アルヒーフ}資料館ならびにエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(1846-1935)をめぐる最新の研究を踏まえながら、ニーチェと大きく係わり合いを持ったこのニーチェの妹エリーザベトの実像を検証し、そのことを通じてニーチェ原典史・研究史の一端を跡付けるとともに、側面からフリードリヒ・ニーチェの思想の核を見届けようとする試みにほかならない。

ニーチェの全集や書簡集の編纂、あるいはニーチェ思想の流布、ニーチェ学の展開という観点に立つとき、ニーチェの実妹エリーザベトの果たした役割は極めて大きく、端的な言い方をすれば、その功罪はまさに相半ばするものがある。

周知のとおり、エリーザベトは、ニーチェ原稿や書簡などの収集保管、ニーチェ資料館の設置とその運営、ニーチェ著作集や書簡集の編纂、ニーチェ評伝や論述書の執筆、大がかりないわゆる「ニーチェ運動」の推進等々、驚くほどの精力的な活動を通じて、ニーチェを「流行の哲学者」(Modephilosoph)に押し上げ、こんにちに至る百年余りのニーチェ研究の歴史に、その端緒を切り開いた。エリーザベトは文字どおり、「ドイツの国境をはるかに越えて、ニーチェ礼讃を世界に布教した女祭司」¹⁾であり、その八面六臂の活動は、否定すべくもない大きな功績である。

しかしその一方でエリーザベトは、すでに多くの指摘に見られるとおり、あまりにも大きな罪過を犯している。すなわち、ニーチェの草稿・書簡の改ざんや隠匿などに手を染め、『力への意志』というニーチェの opus magnus (主著)を恣意的に「でっちあげ」たり、ニーチェ全集をずさんな形で出版したり、